

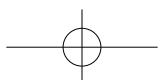
## はじめに

言葉は、子どもたちの自己を形づくり、人との絆をつくりだし、過去から学び未来をつくりだす。保育の場は子どもたちの言葉をはぐくむ大切な場であり、専門家である保育者の果たす役割は極めて大きい。そこで本書では、保育の場にかかわったり実践経験のある方々に、これから保育を学ぶ人にむけての自らのメッセージを込めた本として執筆していただいた、領域「言葉」のテキストとなっている。

2018（平成30）年度から実施の新幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領等に対応した内容とするとともに、教職課程コアカリキュラム・モデルカリキュラムにも準拠したものとして、乳児期から5歳の終わりまでに育ってほしい姿までの子どもたちの園の生活のなかでの言葉に焦点を当て、新しく発行するものである。

それと同時に2009（平成21）年発行の本書の前身となる「新保育シリーズ」『保育内容 言葉』の3点の特徴は、今回の編集に当たっても踏襲をしている。それは第1に初めて学ぶ人たちに保育の基本として知ってもらいたい基礎知識を大事にし、子どもを理解し援助するうえで必要な、子どもの言葉の習得や発達に関わる理解ができるようにすることである。また、第2にどの章でも事例やエピソードを取り上げて紹介することで、学び手が具体的に理解できるよう解説していくようにしたことである。事例にふれることで、実際の保育の場、子ども様子をイメージできるだけでなく、子どもの振る舞いとして見えることの背景に、日々の生活の連続性や経験の積み重ねがあることが伝わるようになることである。そして第3には、子どもだけではなく、子どもの言葉を育てる保育者の役割や専門性が見えるテキストにすることである。

これら3点の特徴をおさえ、専門学校、短期大学、大学において幼稚園教諭や保育教諭、保育士をめざす学生の皆さんが手に取ってわかりやすく、コアと



なる内容を意識して作成した。また、これからの時代に見合ったテキストをめざした。様々な制度改革のなかでも、保育の魅力，子どもの可能性をこのテキストから感じ、将来どのような保育者や社会人をめざすのか，そして急激な変化のなかでも変わらず大切にしていきたいことを学び、考え、子どもの言葉に出会うと同時に、保育者の言葉についてもまた考えてほしい。

本書の出版にあたっては、光生館の皆さんには編集の過程で大変お世話になった。心より感謝申し上げます。

2018年2月

編者 秋田喜代美  
野口隆子